

## お金が教えてくれたこと

滋賀県・守山市立守山北中学校 3年 朝尾 朱貴

「お母さん、今月もお小遣いありがとう。」

私の家では、父・母の給料日の日が私の小遣いの支給日になっている。主に、父がローンや電気代、水道代など、家計を支えるためのお金を銀行に支払い、母が食費や私と2人の姉の服代、小遣いを払っている。お金を渡してくれるのは母だが、家族のために一生懸命働いてくれている父にも感謝の気持ちを忘れたことはない。

私は、小さい頃<sup>ころ</sup>からむだ使いをしてしまう癖があるのか、昔からよく父や母から口癖のように「むだ使いしんときや」と言われる。中学生になった今、お金の大切さを感じ始め、ムダにお金を使う癖がなおってきた。

幼稚園の頃は、よく給料日の日に母と近所のスーパーへ行って、おまけやシール、アクセサリーのついているお菓子を買ってもらっていた。スーパーへ行くたびに、おまけつきのお菓子がどうしてもほしくて、しかたなかった。

だから、すごく給料日が楽しみで、お菓子を選ぶのに、ワクワクドキドキしながらほしいお菓子を買ってもらっていた。

小学生になってからは、学校で算数を習っていたせいか、レジに興味をもちはじめ、それとともに、給料日になるとお菓子ではなくお小遣いをもらうようになった。1年生から3年生の間は月に300円。4年生から6年生の間は月に500円もらっていた。お小遣いをもらっては、友達と一緒に学校の前にあるお菓子屋に走って行っていた。

しかし、不思議とお菓子を買うときに、1つ買ったら残りはいくら、5つ買うとおつりはいくらと、引き算・たし算の練習のように、自分の手元にある金額だけで買えるものを搜したり、少し高いものは2か月・3か月分のお小遣いをたしたりして、買っていた。

その頃から、私は物を買うときにはまず、財布の中のお金と相談をしながら

買うようになった。

私は、物やお金はたくさんあればあるほどいいというものではないと思う。買ってからも、一度も使わなかった不要な物はただのゴミとなってしまう。そして、たくさんのお金はムダに使ってしまい、お金本来の価値が分からなくなり、ほしかったものをやっと買った、あの満足感が得られなくなる。

この世界が、たくさん物やお金にあふれてしまうと、自分にとってどれが本当に必要なものなのか、どれが本当にほしかったものなのか……それらすべてが分からなくなってしまう気がする。

それはお金や物だけとは限らない。自分が今、何をすべきなのか、何をしようとしているのか……人間の生き方にも、大きく関わ<sup>かか</sup>ってくると思う。

「何に今一番お金を使いたいのか」「どのようなものがほしいのか」を、考えることが、ものを買うこと・お金を使うことよりも、まず一番大切なことだと思う。

中学生になった今、昔の頃よりもお金の使い方に気をかけている自分。父と母は、何が目的で私にお小遣いを与えているのか。何を学ぶためにお小遣いを与えるのか。

父や母は、お小遣いを与えることで、私という人間そのものを成長させてくれたと思う。そして、お金の大切さや、お金の正しい使い方、なによりも自分で物事を考えることを教えてくれたと思う。だから、今の私はお金のありがたみを知り、ものを買うときには、「何が今一番ほしくてここに来たのか」を考えてから、買うようになった。もちろん、ムダにお金を使うこともなく、お金そのものの価値観を肌で感じられるようになった。

子どもの頃からの習慣は、成長していくとともに、今の私の心や体にしみついていく。

だから、この先二十歳を越え、成人してからもずっと、お金の大切さを考え、実行することができるから、私は父や母にとっても感謝している。

私が幼稚園の時に、毎月とっていいほど買ってもらっていたおまけのおもちやも、きっと「ありがとう」と言っているような気がする。